

今回は大内氏最盛後期のお殿様の史跡をめぐるります。ときは室町時代、28代教弘は周防・長門・豊前・筑前・安芸・石見・肥前の守護大名となり、勢力は西国一に増大していました。27代盛見が建立開始した五重塔が完成し、西の京として栄えました。

代々の大内氏の住居 大内館・築山館

全国に先駆けて城下町の発想で山口の町を築いた教弘は、町づくりで大内氏の地盤を整え、朝鮮貿易で経済的な基盤もつくりました。後世の発展を語る上で欠かせない人物です。大内館、築山館は教弘が建設しました。のちに連歌師宗祇が「池はうみ こそえは夏の深山かな」と詠むほど壮麗な庭があったようです。



大内館は当時は珍しかった蘇鉄や大分から船で運んだという豊後岩で築庭されていた。海のように十分に水をたたえていた池は復元されています。



現在の築山館跡の土壁には、樹齢を重ねた杉や椿が小さな森を作り、神聖な空気が立ち込めている。2月になると椿が咲き始める。

政弘の別邸 雪舟庭 政弘の菩提寺 滝の法泉寺

29代政弘は応仁の乱で西軍に加勢し活躍しましたが、一方では伯父大内道頼の反乱に遭い、戦に次ぐ戦の生活でした。しかし政弘は「武家文人」と呼ばれるように和やかで素晴らしい人柄だったそうです。都から公卿や学者が多く訪ね文化都市として栄えました。連歌や猿楽などの芸能も庇護しました。



教弘が招いた雪舟を政弘は引き続き庇護しました。政弘の別荘として造らせたのが雪舟庭です。後に政弘の母の菩提寺となりました。



政弘の菩提寺である法泉寺の山門脇に植えてあったと伝えられる法泉寺のシンパク。シンパクはイブキの別名。国指定の天然記念物。根元の周囲は9メートルをこえる。

戦乱の都にひとときの平和をもたらした義興が眠る 凌雲寺

中世武士の理想「文武両道」を体現したのが30代義興です。義興を頼って山口に来た前將軍義隆を9年保護し、再び將軍の座に帰り咲かせると、幕政を左右するほどの存在になりました。また朝鮮交易に加え、遣明船も大内氏が独占して担い、栄華を極めました。



前將軍義隆をもてなしたという32献の御膳を再現。中世では日本一の量を誇る。タラの内臓の塩辛や干しなまこ、キジなど珍食品も並んだ。



義興はたびたび安芸国に侵襲してくる尼子氏と戦った。安芸の陣中で病気になる、帰国後没した。菩提寺の凌雲寺には朝鮮様式の石垣が残り、壮観な眺め。

義隆が延命を祈願した 万福寺 義隆の菩提寺 龍福寺

義隆のときに山口の町は最盛期を迎えました。義隆は大陸との交易を積極的に行い、戦乱の京都を逃れた公卿や文化人を擁護し、自らは京都に向くことなく高い教養を身につけていたと言われています。サビエルが荒廃した都をあきらめて山口に来たときには、布教を許し新たな文化をもたらしました。



万福寺の黒地藏。家族の延命を祈願して義隆が仏師覺繼に造らせた。右手を頬にたて、右膝をたて左足を踏み下げる姿勢は延命地藏菩薩の姿。鶯舞の出発地。



義隆は戦国下剋上の世にあり武断派の陶晴賢に謀反をおこされ、長門大學寺にて自刃した。45才。辞世の句には「討つ人も討たれる人ももろともに」と無常観を詠った。

開府650年にあたり、大内氏の威光を振り返ってきました。知れば知るほど魅力的な人物像が浮かび上がってきます。伝統や文化を守るために時に命がけで戦っています。数々の遺構が時代をこえて送ってくるメッセージを真摯に受け止めていきたいものです。

ホテル・ヤマグチ



山口市菜香亭館長 福田礼輔

スペイン領のピレネー山麓が丘陵地帯となり、さらに平野部へとパンプローナ市郊外を遠くサビエル城近くまでひろがるブドウ農園の一角にホテル・ヤマグチが存在する。

1949年のサビエル四百年祭に建造されたキリスト教団の巡礼宿でパンプローナ市と山口が友好関係を結ぶ以前から存在するスペインと日本の歴史を感じる施設である。

現在の山口八坂神社や旧菜香亭跡地は中世室町期に西日本を支配した大内氏の広大な築山御殿があった所で、1551(天文20)年の春フランスコ・サビエル一行が絹の聖衣を着用して領主大内義隆に面会され、ゴアの司教ジョン・デ・アルブレルの親書とオルゴール・時計・ワインなど13種類の献上品を贈呈している。

当時大内義隆の念頭には山口を京都に次ぐミヤコにすることがあった。そのためには、主導権争いでの衰微してきた京都から公家、学者、文人などを引き、さらには明国、朝鮮半島、琉球に及ぶ国際交易を盛んにすることに熱心でありサビエルのキリスト教布教にも国際感覚で応じている。

大内義隆とサビエルの会見後1554(天文13)年12月、パードレ・パンテザル・カゴ司教とイルマンジイルマン・ジョン・フェルナンデス司教は山口への到着して降誕祭のミサを歌い、良き声にあらざりしがクリシタンたちは大いに喜びたりとポルトガル本国への報告書簡が保存されている。

哲学者の和辻哲郎は著書「鎖国」の中に「山口におけるシャビエル」の一節があり「山口の町では鹿兒島と違い迅速に活発に伝道が開始された。町の人たちは新しい教導を聞くため熱心な質問が続き歯のない老婆までいてラテン語の主の祈りを暗記した」と。

中世の山口住民が「十字架」の扉を開けた歴史は記念聖堂の鐘の音に籠っている。



ザビエルの渡航図



平成23年2月1日発行 第19号 発行元:山口市菜香亭 指定管理者 特定非営利活動法人 歴史の町山口を甦らせる会

西の菜時記

山口市菜香亭だより

西の菜時記

平成23年2月1日発行 第19号 発行元:山口市菜香亭 指定管理者 特定非営利活動法人 歴史の町山口を甦らせる会